

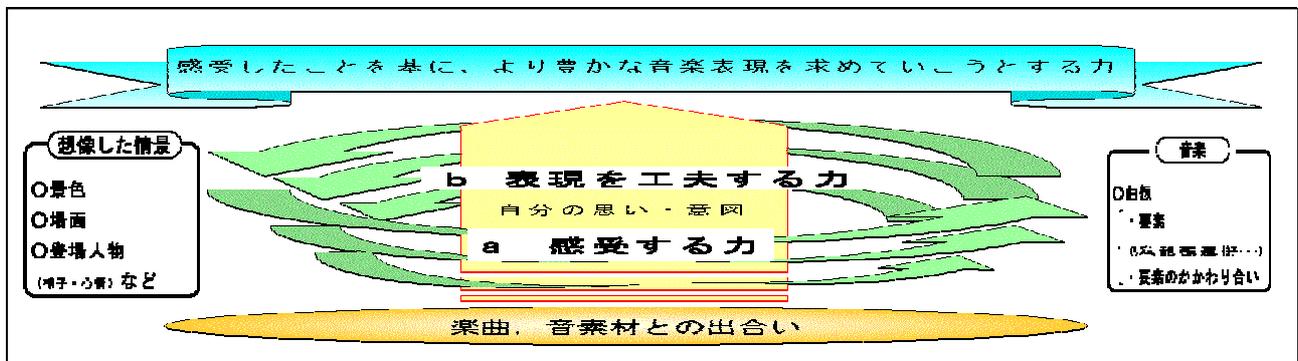
音楽科

育成したい「思考力」

- a 感受する力：音楽を形づくっている要素や、その関わり合いから生まれる曲想を基に、音楽の表す情景を想像する力
- b 表現を工夫する力：音楽から想像した情景と結び付けながら、音楽を形づくっている要素や、その関わり合い方を、自分の思いや意図をもって創意工夫する力

小学校学習指導要領において、表現及び鑑賞の活動の支えとなる指導内容が〔共通事項〕として示されている。そこでは、音楽のよさや面白さ、美しさを感じ取る際に聴き取るべき音楽の要素が明確に示された。

そこで、本校音楽科では、その〔共通事項〕に示された音楽の要素を基に感受したり、表現を工夫したりすることを重視し、そこで必要とされる力を「思考力」としてまとめた。



a 感受する力

音楽は、リズムや音色、強弱等のさまざまな要素により特徴付けられている。そしてこれらの要素の関わり合い方によって独自の構造をもち、それが楽曲に固有の曲想を生み出す。

これら楽曲の独自性を基に、そこから情景を想像する力が「感受する力」である。このように「感受する力」とは、音楽的な刺激を受け取るという受動的な面にとどまらず、その刺激に対して自分の心象を形成するところまで含めて捉える。

また、実際の学習においては、『タッカ』のリズムがはずんでいて、踊っているような曲だなあ。」と音楽を特徴付けている要素から情景を想像することもあれば、逆に「お祭りのような曲だ。」と最初に情景が浮かび、続いてその根拠となる要素を聴き取っていくこともある。感受する力は、このように音楽の要素と情景の双方を行き来しながら高められていくのである。

以下に「感受する力」の実践例を紹介する。

第4学年「拍子の違いを感じ取ろう - [エーデルワイス] [トルコ行進曲] [ラバースコンチェルト] [メヌエット] -」の実践より

【本単元で育成したい「思考力」】

拍子と音楽を形づくっているその他の要素との関わり合いから生まれる曲想を基に、音楽の表す情景を豊かに想像する力

音楽鑑賞をする際に、強弱、速度、音色、高さ等、音楽を特徴付けている要素に着目して旋律の違いを聴き分けることが重要である。本実践では、拍子による感じの違いを捉えた後、『メヌエット』の鑑賞において、長調と短調の二つの雰囲気の違い『メヌエット』を聴き比べた。そうすることで、演奏している楽器の音色や曲の速度、明るい・暗いといった調による感じの

違い等、拍子以外の要素に気付いていった。気付いた要素を基に、再度曲をじっくりと聴き味わうことで思い浮かぶ情景を膨らませ、「1曲目はうきうきした様子で軽くステップを踏みながらターンして、にこにこ笑顔で踊っている。」や「2曲目はちょっと薄暗いところで、悲しそうな表情の人がゆっくり歩くように踊っている。」というふうに情景をより豊かに思い浮かべていった。

このように、音楽を特徴付けている拍子と、音色、速度、調といったその他の要素とを結び付けて情景を豊かに想像する力が「感受する力」である。

	① 感じ	様子	② 感じ	様子
音色	ピアノ	はずんで元気にこり楽しいつれづれ	リコーダ	広いおかしなでびいびい
速度	なめらか	ゆくり 楽しく	速	アカれて 楽しく
調	明るい	みんな楽しく 広い えがお	暗い	おかしな 悲しい

【要素を基に情景を想像する】

b 表現を工夫する力

既存の楽曲の演奏を工夫する際には、自分の思いや意図を明確にもつことが求められている。そして、その思いや意図に合った表現をするために、音楽を形づくっている要素や、その関わり合い方を創意工夫するのである。

具体的には、例えば「速度の工夫」のように要素自体を工夫することもあれば、「旋律の呼応」のように単一要素の関わり合い方の工夫、さらには、「旋律とそれを演奏する楽器」のように別の要素の関わり合い方の工夫もある。

なお、この「表現を工夫する力」は、上で述べた「感受する力」に支えられていることは言うまでもない。情景を想像することで、「このような音楽にしたい」という思いが一層強まるからである。また、音楽を形づくっている要素が、楽曲にどのように働きかけるかを感じ、理解していなければ、要素を選んだり組み合わせたりすることもできないからである。

以下に「表現を工夫する力」の実践例を紹介する。

第2学年「ゆかいな音楽をつくろう — 『ゆかいな時計』 —」の実践より

【本単元で育成したい「思考力」】

テーマに沿って様々なリズムをつくり、それらのリズムを組み合わせて各場面にあわしい表現を工夫する力

子どもたちは始め・中・おわりの三つの場面からそうじの様子を音楽で表そうとした。そのために、掃く、拭く、拾う等そうじの様子を表す1小節単位のリズムを数種類つくった。これらのリズムを組み合わせて音楽をつくるのだが、リズムを選択することができても、場面ごとにまとまりのある表現をすればよいことに着目できていない。そのため、始めの場面よりも仕事が増え、たくさんの音が聞こえてくる中の場面を表そうとしても、あまり変化が感じられない。

そこで、単元の冒頭で鑑賞した『ゆかいな時計』のリズム楽譜を提示すると、作曲者のアンダソンは始めの場面から中の場面へと大きく変化させたリズムを用いたり、二つの異なるリズムを重ねたりしていることに、子どもたちは気付くことができた。その後の活動では、作曲者の工夫を取り入れようと、繰り返す回数や変化させる部分、重ねるところを手拍子で試していく子どもの姿が見られた。そして、「掃く音と机を運ぶ音を重ねたら、忙しそうな感じになった。」等、前の場面から様子に変化していることを表すリズムを組み立てられるようになった。



【付箋を操作し、リズムを組み立てる】

このように、音楽の仕組みについての知識を用いて情景にふさ

「わしい表現を工夫することが「表現を工夫する力」である。